

# 信 通 欧 渡

(東京) 有 賀 左 喜

今年の八月二十二日から

一十九日まで、オランダのアムステルダムで開催され

た、国際社会学連合の水三

回世界大会に日本代表とし

て参加するため、有賀喜左

路羽田を出発された。本年

衛門氏は八月十二日深更空

路羽田を出発された。本年

の大会の共同課題は「二十

世紀における社会変化の諸

問題」で、八つの部会から

構成される。そのオ四部会は「民族に見られ

る変化」であるか、これは一般・西洋・東洋

の三分会に分れ、有賀氏はプリンストン大学

のマリオン・レヴィ氏と共に東洋の分会の座

長をつとめられることになつて、いた。村落

社会研究会の会員としては武田良三氏も参加

されたが、有賀氏の書面によつてその近況を

お伝えすることにした。

(アムステルダムより)

(上略) つんばとなしの旅行は、小生をしてアムステルダムへ来させた。途中イスタンブール、ジエネーラにより、ベルジも見たし、ケンブラング彼らの峻峰に電車で登山して、時天のアルプスをたのしんだ。僕は片言で英語の

通ずる不思議「奇蹟」に驚き、英語が次第にしゃべれそくなつて来たのに更に驚いてい

るが、それは旅行に限つてのことだ。

ISAのコングレスでは全くまいつた。し

かし新しく参加したロシアはロシア語を要求

して平氣で喋るので、西欧諸国は僕に日本語

を喋べるようにすすめた。僕は國語を喋べつ

て国民性を主張する程の意識は学会では必要

ないと思ひ、もつとも便宜主義だが、日本語

で発表し中根チエ氏が翻訳した。態度はなか

なかよかつたと同行の武田・岩崎両君がほめ

てくれた。しかし自分で決してそうは思は

れぬ。やはり土つていたようだ。

(これは廿五日)

廿七日には僕がチエアマンになる筈だつた

が、やめにマリオン・リヴィがした。彼は小

学生に対して實に丁寧親切で尊敬を持つてくれ

るのにうれしくなつた。やはり論文をいくつ

も書いて送つておいた事は役に立つた。これ

でお役目がほぼ終つたから、これから旅をゲ

ニーセンするつもりだ。

(ロンドンより)

ロンドンに来て沢山の画を見た。ケンブ

リッヂ大学・オックスフォード大学を見て、

イギリスの文化の何がかをぞき得た思い

だ。僕は一応驚き、それから日本人に帰る。

僕は一応驚き、それから日本人に帰る。

僕は一応驚き、それから日本人に帰る。

僕は一応驚き、それから日本人に帰る。

僕は一応驚き、それから日本人に帰る。

僕は一応驚き、それから日本人に帰る。

僕は一応驚き、それから日本人に帰る。

僕は一応驚き、それから日本人に帰る。

た。僕はやはり芸術に最も心を引かれる。

オランダではエキスカーションにPolder

(干拓)を見た。これも日本人にとって

実に教をられる。ゾイテル海は今や次第に

干拓されつつある。オ四期計画で完全に陸

地になる。オランダには天の候中主がいて

因縁に夢中だ。僕はオランダの神代を現実

に見た。オランダはやはりおそるべき力を

もつ。

西洋の農村も都市もそういう創造物の一つであることを知つた。美術が社会学と関係ないとは云へない。そして僕はこういふいろいろのことを知ると共に、僕自身はますます日本人になり、日本人として大きくならなければならぬことを思う。

明日（十日）マドリッドに行く。